

# 歴史を語る建物たち

庄内編  
(第3回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

## 小野太右衛門商店（酒田市）



酒田市役所からマリン5清水屋方面に羽州浜街道を北進し、浄福寺など寺院が散在する交差点を左折すると、昔ながらの町屋家屋がある。明治期より雑貨店を営む小野太右衛門商店で、元禄時代にさかのぼる小野太右衛門が、江戸末期にもともとあった家屋を改築して移り住んだ。なお、棟札の所在が不明なため、家屋の正確な建築年次は不明である。

### 酒田大火の延焼を水際で止めた

昭和51年10月29日の17時40分頃、上映中の映画館「グリーンハウス」から出火した火災は、折からの強風にあおられ、瞬間に酒田市街を火で覆った。日本の戦後火災史に名を残す「酒田大火」の発生である。

自衛隊まで出動して消火活動にあたったが、火災は夜になっても衰えず、火は小野太右衛門商店まで迫っていた。大きな家屋である商店が焼ければ、さらに延焼することが懸念されたため、周辺住民も蔵に上って家屋に水をかけ続けた。近くに井戸水が豊富にあったことや、商店で販売していたバケツを消火リレーに使えたことも幸いした。おかげで、蔵の鞘（外覆い）

の一部が焼けたものの、それ以上の延焼を食い止めることができた。

その日は、現在の10代目小野太右衛門さんの両親が、赤い羽根の山形県共同募金会会長として秋の園遊会に



大火で一夜にして焦土と化した酒田市街。商店は焼け跡の西北端にあって火難を逃れた。

出典：『酒田大火記録と復興のあゆみ』（酒田市）

招かれており、小野家にとっておめでたい日であった。よし子夫人は、「まさしく、昼は天国、夜は地獄でした。“10月29日”は今も忘れることができません」と話す。

### お雛様を出すのは重労働だが楽しい

今では、初春の酒田の風物詩となった「酒田雛街道」であるが、小野家はお雛様とも縁が深い。

平成19年に、蔵の中から幕末頃に作られたとみられる「傘福」のセットが見つかり、地元の愛好者や旧家などの協力を得て、1年余りかけて修復が行われた。一般的に、傘福は神社仏閣に奉納されるものであるが、小野家の傘福には台車が付いており、祭りのパレードに用いられる「傘鉾」と形状が似ている。つまり、台車に乗った傘福は珍しく、あまり類を見ない貴重な逸品といえる。

また、平成22年と23年には、東京の目黒雅叙園で「山形ひな紀行Ⅰ(22年)、Ⅱ(23年)」が開催され、小野家の雛人形も飾られた。歴史的価値を持つ雛人形は非常にデリケートで、トラックで運ぶ際にも包装や温度管理が徹底された。また、東京の空気に慣れさせるために、開催日より少し前に運ぶ念の入れようであった。

さらに、長野県松本市が本場とされる「押絵雛」も、小野家には多く残されている。「NHKで放送されたら、30分後に見物客が来た」と、小野さんはその価値を強調する。

雛街道では、当然これらが屋内に展示されるが、近くに酒田の代表的観光スポットである相馬楼があるせいか、小野太右衛門商店は素通りされてしまうこともあるという。そんな時、よし子夫人は自ら沿道に出て、積極的に道行く観光客を招き入れている。「確かに蔵からお雛様を出して飾るのは大変ですが、それを多くの方に見ていただき、会話をすることで、私どももいろいろ勉強になります。それが楽しみなのです」とよし子夫人は笑う。

### 兼高かおるさんなど有名人も訪問

かつてはふすまを外して、二間続きの大広間で慶弔も行っていた伝統的家屋に、有名人も多く訪れている。その一人が旅行家の兼高かおるさんで、ふとした縁から仲間を連れて、たびたび小野太右衛門商店を訪れた。「兼高さんはとても気さくな方です。後で知ったのですが、お仲間には公家の家系の方もいらっしゃって驚きました」とよし子夫人。その他、女優の小林綾子さんや、フリーアナウンサーの橋本志保さんなども、テレビの取材で訪れている。また、別の仕事で酒田を訪れていた俳優の六平直政さんもふらっと立ち寄り、その造りに驚嘆したそうだ。よし子夫人は、「六平さんは美大を出ておられるので、この家の建築的価値が分かれたのではないのでしょうか」と話す。

研究者の訪問もある。鶴岡で写真館の歴史を研究していたフランス人のガボリオ・マリ教授（慶應義塾大学）は、歴史が古い小野家なら、昔の写真などを所蔵しているかもしれないと、ある時、光丘文庫の学芸員に連れられてきた。実は、ガボリオ教授は以前から庄内の集落調査をしており、小野さんとは久しぶりの再会であった。以来、何度も小野家を訪れており、筆者が取材に訪れた日も午前中に来て、話をしていたそうだ。「マリ先生は、その土地の文化を知らなければ言語は身につかないと、常々おっしゃっています」という、小野さんの言葉が印象的であった。

### 今だから求められる「本物」

失礼を承知で記すと、筆者が取材している間、悪天候の影響もあってか、商店には一人もお客さんが来なかった。小野さんは、「安価なホームセンターに押されて商売は厳しい」と嘆く。

しかし、商品はほとんどが国産で良質だ。そして意外なことに、ホームセンターより安い商品もある（囲い縄など）。「ホームセンター＝安いという固定観念で買い物をしている人が多い」と小野さん。

「店をたたんでもいいと思うこともあります。『昔のものはないか?』というお客さんのニーズもあり、また、そうしたお客さんとの触れ合いも大切にしていきたいと思っています。ウチの商品は、昔ながらの“本物”だという自負があります」と話す小野さんの口調は自信に満ちていた。

ところで、第54回私の街さかた写真コンテスト（平成26年12月）では、酒田市在住の太田町子さんが撮影した、小野太右衛門商店前の風景も含めた組写真「神輿を待つ人」が特選を受賞した。

文化的景観としてもその価値を十分に発揮している建物を、これからも大切に守っていききたい。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）



商品として売られている山形県最上産の「かんじき」。めっきり見かけなくなったが、森林管理署の職員などが今でも使用するという。（写真：筆者撮影）